

岩手県総合計画審議会
令和4年度第1回県民の幸福感に関する分析部会

(開催日時) 令和4年5月19日(木) 9:30~12:00

(開催場所) エスポワールいわて 特別ホール

- 1 開 会
- 2 議 題
 - (1) 部会長及び副部会長の選出について
 - (2) 県民の幸福感に関する分析部会について(審議内容等)
 - (3) 分析方針について
 - (4) 分野別実感の分析について
 - (5) その他
- 3 閉 会

出席委員等

吉野英岐部会長、若菜千穂副部会長、竹村祥子委員、谷藤邦基委員、

Tee Kian Heng(ティー・キャンヘーン)委員、山田佳奈委員、和川央委員

欠席委員等

広井良典オブザーバー

1 開 会

○高橋政策企画課評価課長 それでは、御案内の時間になりましたので、ただいまから第1回県民の幸福感に関する分析部会を開催いたします。

私は、事務局を担当しております政策企画課の高橋でございます。どうぞよろしく願いいたします。

本日は、広井オブザーバーが欠席してございますけれども、運営要領第6条第2項に基づきまして、委員の半数以上の方に御出席いただいておりますので、会議が成立していることを御報告いたします。

なお、本日は竹村委員、若菜委員にはリモートにより御出席いただいております。

それでは、開会に当たりまして、政策企画部長の小野より御挨拶申し上げます。

○小野政策企画部長 第1回の分析部会の開催に当たりまして、御挨拶申し上げます。

分析部会の委員の皆様には本当に日頃から、なかなか困難な分析でございますけれども、御意見をちょうだいし、取りまとめを毎年度いただいておりますので、誠にありがとうございます。

委員の皆様にお会いしますと家に戻ってきたような気持ちでございまして、またティー先生には前の経済モデルのときから大変お世話になってございまして、委員の皆様にはこの自身の研究会のときから大変な作業を集中的に御協力、様々御指導いただいておりますので、改めて感謝申し上げます。

そういった研究会での御報告を基にいわて県民計画が立ち上がりまして、その中心になるのは御承知のとおり幸福度の12の領域に基づく10の柱に基づいて県民計画を進めてきております。

この県民計画も今年度が4年目といったことで、第1期アクションプランの最終年度になります。そして、来年度から、令和5年度からは新たな第2フェーズであります第2期のアクションプランに移っていくという今年度は非常に重要な時期に差しかかっております。今年度その第1期アクションプランがどうだったかといったことの総括を行い、そして来年度からスタートするアクションプランを策定するというようなタイミングに入っております。こうした中での今年度の分析部会でございますけれども、県民意識調査などで把握いたしました県民の主観的な幸福感、これを専門的、また行政だけでない様々な観点から分析いただくといったことで、まずは今回今年度行うべきところについて皆様から御意見をちょうだいして取りまとめを行う。そして、それを基に4年間これまでの取組等も俯瞰しながら、次の第2期アクションプランにつなげていくというような作業を進めてまいりたいというふうに考えておりますので、委員の皆様には引き続き様々な観点から、専門的な観点から御意見を様々ちょうだいでできればというふうに考えておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

○高橋政策企画課評価課長 それでは、議事に入ります前にまず資料の確認をさせていただきます。

本日の資料につきましては、資料1から資料6、さらに参考資料1から参考資料5ということになってございます。お手元の資料を御確認いただきまして、さらに追加配付として「いわて幸福白書」の冊子の方もお配りさせていただいております。資料の不足等がもしございます場合にはお知らせいただければと思いますが、よろしいでしょうか。

それでは、また前回1月の部会におきまして御了承いただいておりますが、県民意識調査の結果について速報の段階であるということから、今回の部会については非公開ということで開催してございます。

続きまして、本日が委員改選後第1回目の部会開催となりますので、委員の皆様を御紹介させていただきたいと思っております。五十音順に名前を読み上げますので、恐縮ですが、一言御挨拶をいただければと思います。

竹村祥子委員でございます。

○竹村祥子委員 竹村です。リモートで申し訳ありません。よろしくお願いいたします。

○高橋政策企画課評価課長 谷藤邦基委員でございます。

○谷藤邦基委員 谷藤です。よろしくお願いいたします。

○高橋政策企画課評価課長 ティー・キャンヘーン委員でございます。

○ティー・キャンヘーン委員 ティーです。よろしくお願いいたします。

○高橋政策企画課評価課長 山田佳奈委員でございます。

○山田佳奈委員 山田です。よろしくお願いいたします。

○高橋政策企画課評価課長 吉野英岐委員でございます。

○吉野英岐委員 吉野です。よろしくお願いいたします。

○高橋政策企画課評価課長 若菜千穂委員でございます。

○若菜千穂委員 よろしく申し上げます。

○高橋政策企画課評価課長 和川央委員でございます。

○和川央委員 和川でございます。よろしくお願いいたします。

○高橋政策企画課評価課長 なお、広井良典オブザーバーにつきましては、本日欠席となっております。

続きまして、議事に入りたいと思います。

資料1、県民の幸福感に関する分析部会についてを御覧いただきたいと思います。失礼しました、参考資料1の県民の幸福感に関する分析部会運営要領を御覧いただきたいと思います。運営要領第4条に基づきまして、部会の議長につきましては部会長が務めることとされておりますが、本日が最初の部会でございますので、部会長が決まるまでの間、暫時私のほうで進行を務めさせていただきますので、よろしくお願いいたします。

2 議 題

(1) 部会長及び副部会長の選出について

○高橋政策企画課評価課長 では、議題(1)、部会長及び副部会長の選出に入ります。部会運営要領第4条に基づきまして、部会には部会長を置き、部会長は互選によって定めるものとしてございます。選任の方法でございますが、いかなる方法で行うか御意見ございますでしょうか。

「なし」の声

○高橋政策企画課評価課長 御意見がないようでございますので、事務局からの指名推薦の方法によることとしてよろしいか、お諮りいたします。

「異議なし」の声

○高橋政策企画課評価課長 ありがとうございます。それでは、事務局といたしましては、総合計画審議会委員であり、前期においても当部会の部会長を務められました吉野英岐委員を推薦させていただきたいと思っております。御異議ございませんでしょうか。

「異議なし」の声

○高橋政策企画課評価課長 それでは、部会長に吉野英岐委員が選任されました。部会長におかれましては、よろしくお願ひいたしたいと思っております。

それでは、吉野部会長には部会長席にお移りいただきまして、以後の議事の進行をお願いしたいと思います。

○吉野英岐部会長 それでは、引き続き部会長を務めよということですので、皆さん知った顔ではありますが、引き続きよろしくお願い申し上げます。

議事は副部会長の選出ということもあります。副部会長は、部会の運営要領第4条の規定に基づきまして、部会長が副部会長を指名するということになっております。ということで、総合計画審議会委員であります若菜委員が副部会長に適任と思われまますので、御指名したいと思います。御異議ありますか。

「異議なし」の声

○吉野英岐部会長 若菜さん、聞こえていますか。

○若菜千穂副部会長 はい、よろしくお願ひします、引き続き。

○吉野英岐部会長 そういうことで、若菜委員には引き続き副部会長を務めていただきます。一言挨拶するようになっているのですが、どうぞ若菜さんからお願ひします。

○若菜千穂副部会長 よろしくお願ひします、引き続き。

○吉野英岐部会長 ということで、体制としては同じなのですけれども、大分いろいろ世の中ここ何年かで上がったたり下がったりみたいなことがありましたので、気を引き締めて今の状況をよく観察しながら部会としての分析結果を出していきたいと思っております。よろしくお願ひします。

(2) 県民の幸福感に関する分析部会について（審議内容等）

○吉野英岐部会長 それでは、県民の幸福感に関する分析部会について、事務局から御説明をお願いします。

○池田政策企画課特命課長 それでは、今年も担当させていただきます池田です。どうぞ

よろしく願いいたします。説明の方は座ってさせていただきたいと思います。

それでは、資料1を御覧ください。資料1につきましては、部会の役割、構成等々について御説明をさせていただいているところですが、皆様昨年度に引き続き今回委員を御就任いただいたということで、お分かりの部分あるかと思いますが、簡単に御説明をさせていただきます。

部会の役割といたしましては、県民の幸福に着目して策定したいわて県民計画の着実な推進ということで、県民の主観的な幸福感の変動要因を把握したいということから、今回専門的かつ県民目線で分析をしていただき、最終的にはこの部会の報告という形で総合計画審議会のほうに御報告をさせていただくというような役割を担っている部分でございます。

部会委員ということにつきましては、別紙の方におつけしてございますけれども、先ほど皆様のほうから御挨拶をちょうだいした形で、本日は広井先生だけ御欠席ということになってございますけれども、このメンバーで引き続き御審議の方をお願いしたいというふうに考えてございます。

3、審議の内容ということでございます。こちらにつきましては、今まで令和2年度から県民の幸福感に係る県民意識の変動要因の分析ということを行ってきておりましたので、これについては引き続きさせていただきたいと思っております。

すみません、昨年度のレポートのところにおいては、今年度幸福実感等指標のところという話もございましたけれども、新型コロナウイルスの関係もあって指標の数もなかなかそろっていないという状況もありますので、こちらについては引き続き申し少しお時間をちょうだいしながら分析のほうをさせていただきたいと思っておりますので、今年の審議内容からは外させていただきたいというふうに考えてございます。

4番で、審議日程と審議内容ということでございます。こちらにつきましても昨年度同様5回の開催を想定してございます。本日1回目ということで、分析方針の決定と分野別実感の変動要因を検討ということを行わせていただきまして、第2回目は来週になるのですけれども、26日に今回検討が行えなかった残りの部分について検討を行ってまいりたいと考えてございます。

第3回は6月23日を予定してございまして、こちらの方につきましては第1回、第2回の取りまとめをしながら、さらに分析を進めていただき、第4回でレポートの素案というところを目指していきたいと思っております。ここの第4回の部分で我々の方としては政策評価の方への反映ということも考えながら準備の方をさせていただきまして、最終的には第5回でレポートの方は確定させていただくという運びになってございます。その際については、補足調査の関係についても例年に比べ、ちょうど切替えの時期でもありますので、いろんな点について調査のやり方等を含めて御審議いただきたいと思いますし、あと昨年度委員の方々からもお話をちょうだいしたところですが、第4回ぐらいからできれば分析、振り返りの部分のお話も少しずつできたらいいのかなというふうに考えてございますので、よろしく願いいたします。

事務局からは以上です。

○吉野英岐部会長 ありがとうございました。

今資料1に基づいて池田さんから御説明がありましたので、リモート委員の竹村委員も資料1がお手元にあるという前提でやっていたけれども、大丈夫ですか。趣旨、役割、そしてメンバー、それから今年度審議する内容、さらにスケジュールまで説明がありました。いろいろと事前にも聞いている話が多かったと思いますけれども、御質問等ありましたらお願いします。

「なし」の声

○吉野英岐部会長 5回の部会が予定されておりますので、御出席をお願いするところですが、部会の前後に個別にまた御意見をいただくことが多分事務局側から来ると思います。引き続き委員の皆様には御協力をお願いしたいと思います。よろしくお願いします。

和川委員。

○和川央委員 1つ御質問させていただきます。

昨年度までについては、政策評価に反映させるという視点で分析部会は議論してきたと思うのですが、今年度についてはアクションプラン策定するという新しい作業が県の方で入ってくると思います。いただいた資料では、基本は昨年度と同じような流れの計画としていて、最後のほうに補足調査の内容、見直しというのが入っているのですが、今後このアクションプランの策定が進むに当たって、関連する業務は入ってくる可能性があるものなのか、今年度は大体このような形で進んでいくというものなのか、今確認をしたいと思います。

○吉野英岐部会長 事務局お願いします。

○池田政策企画課特命課長 お話のとおりアクションプランの策定ということがございますので、具体的にこういう形でというところまで今ちょっとお話しできる段階ではないのですが、いずれ分析部会の皆様に実感の変動のところを踏まえた御意見というものはお聞きする方向では事務局としては考えてございますので、追ってその点については御相談をさせていただきたいと考えてございます。

○吉野英岐部会長 よろしいですか。

○和川央委員 はい。

○吉野英岐部会長 総合計画の中で、あれ10年の計画ですけれども、部長の方からも冒頭お話あったとおり、4年、4年、2年で区切りをつけて計画を動かしていると思います。その4年、4年、2年の第1期の最初の4年の最終年度が今年になって、令和5年度からは新しい4年間のアクションプランが動き出すと。その前に当然アクションプランを決めなければいけませんので、そのときにここで議論している内容や全体の情勢などが反映される可能性あると思いますので、和川委員からお話あったとおり通常の評価に使っていく

という使い方と第2期のアクションプランを作るのに当たり、皆さんに共有していただきたいような情報や分析の結果を私どもから出していくことも当然求められるのではないかなと思っております。部長、それでよろしいでしょうか。

○小野政策企画部長 今委員長お話のようなことで結構かと思ひまして、やっぱり基本的には分析部会のほうで毎年度、毎年度分析いただいておりますので、その積み上げといったこともあるのかなと思ひますけれども、それに加えて、今年度が実質的には4年目なので、データ的には1年前までですけれども、そこまでを含めて単年度プラス全体を概観して、恐らくその趨勢というのはそんなにびっくりする動きはしていないと思ひますけれども、中にもしもここは要注意だなというようなものがあれば、そこについて全てではなくて、何か注目すべき部分があれば、その辺については複数年の中で、この辺ちょっと気をつけたほうがいいのかという分析も、御意見もちょうだいできれば、次の4年間につなげていくことは可能かなと思ひます。特に景気動向、円安傾向、それからコロナ、DXもございますし、この4年間でかなり大きく環境が変化しておりますので、単純にずっと見ていいのか、あるいはやはりこの4年間、3年間で見るとはなかなか難しいところがあると思ひますけれども、もしもこの分析部会の中で、特にどのような項目があれば、それはぜひ次のアクションプランの方に生していきたいというふうに考えております。

○吉野英岐部会長 ありがとうございます。

ということで、通常の業務に加えて、数年間の動きも念頭に置きながら御議論を進めていきたいというふうに考えております。よろしく願ひします。

ほかはよろしいですか。

「なし」の声

(3) 分析方針について

○吉野英岐部会長 それでは(3)、分析方針につきまして、また事務局から御説明願ひします。

○池田政策企画課特命課長 それでは、資料2を御覧ください。分析方針ということで、先ほど昨年度に引き続いて分析の方については実感の変動のところを行っていきまふということですので、大きな変更は特にはないというふうに考えてございます、現時点ではですね。分析目的といたしましては、先ほどお話しいたしましたように政策評価と、もしくは今回計画もございまふので、そうしたものに意識調査の結果を反映していくというための材料とするということでございます。

基本的考え方といたしましては、県のマネジメントサイクルを活用するという中において10の政策分野に係る分野別実感の分析を行っていく。特にも実感が低下した分野については優先的な分析を行っていくということの基本とさせていただいているところでございまふ。

分析手順といたしましては、昨年度同様県民意識調査の結果について、分野別実感の時系列変化の有無を検定して、分析対象を整理した上で対象分野の属性差を見ていったりしながら要因の分析を行っていくとごさいます。要因の分析に当たっては、補足調査の方を活用させていただいて、そちらのほうで同様の変化をしている方々の御意見から変動要因を推測していくという手法を選択してごさいます。

ちょっと昨年と違って下のところに箱囲みを入れてごさいます。今回行った補足調査のところについて、今まで平成31年の県民意識調査については「心身の健康」で聞いていて、補足調査については「からだの健康」、「心の健康」という形で分けておりましたので、単純にその実感の比較ができなかったという課題がごさいます。それで、今年の調査から「心身の健康」の実感把握だけを補足調査の方にも追加をさせていただいてごさいますので、今回は平成31年と令和4年の「心身の健康」の実感の変動が初めて補足調査でも把握ができるようになってごさいます。その点で、ちょっと分析の仕方が変わってきているというところごさいます。

「心身の健康」の差を見た後に、「からだの健康」、「心の健康」に分けてどう見ていくかということなのですが、今回理由の選定として活用させていただいているのが「心身の健康」で実感が上昇した人というふうに定義しているのが「心身の健康」で実感が上昇している人であって、「からだの健康」もしくは「心の健康」の実感で「感じる」、「やや感じる」と回答した人を選んで、理由を整理させていただいております。同様に低下した人については、「心身の健康」で実感が低下しているのだけれども、はっきり低下していて、かつ「からだの健康」もしくは「心の健康」の実感が「あまり感じない」、「感じない」と答えたような方々の理由を選定して整理をさせていただくというような手法を今回取らせていただいております。この点が昨年度との違いということになります。

次のページの5番のところなのですが、これらの各分野の実感変動の要因の分析に加えて、例年どおり一貫して低値ということで3点未満のものの属性ですとか、高値ということで4点以上の推移している属性のほうの要因についても分析を進めていくということで、あわせて昨年度行いました追加分析として新型コロナウイルス感染症の影響ということについて、今年度も引き続き分析をさせていただきたいというふうに考えてごさいます。これらを踏まえて、レポートの作成をしていきたいというところごさいます。

以下分析フローのような形で単純にフローは後ろのほうにお示ししておりますが、今回の内容ということごさいますので、説明の方は割愛させていただきます。

事務局からは以上です。

○吉野英岐部会長 ありがとうございます。

今議題2の(3)の分析方針につきましての昨年度との違い等々も含めての説明がありました。案ということになっているので、これでよろしければこの方向でやりたいということごさいます。委員の皆様御意見があればお願いしたいと思います。

「なし」の声

○吉野英岐部会長 特に御意見なければ、この方針に従ってまずやってみまして、さらに

何か新しく課題が出たり、発見があったりしたら、随時取り込んでいくというのを少し柔軟にやっていきますので、この後膨大な資料が皆さんの目の前に提示されますので、膨大な資料をどこまで今日やれるか分かりませんが、丁寧に見ていながら、この結果についてどういうふうにか考えたらいいかということも最初の2回は比較的自由に皆様の知見に基づいて解釈なり評価なりをしていただく形になると思いますので、いろいろとアイデアを膨らませてこの後、方針に従って結果についてのコメントをお願いすることになると思います。

資料が膨大で、私の手元に今5センチ以上あるのですけれども、若菜委員と竹村委員も資料はよろしいですか。大丈夫ですか、たくさんあるのですけれども。目の前にいると、はい、これと言えるのですけれども、ないとちょっと待っていることになるので、確認しながらやりたいと思いますので、この後資料3以下が説明の素材として使われますので、よろしくをお願いします。

それから、ちょっと言い遅れましたけれども、今全体の画面が映っていると思います。私が画面に向かって右側でしゃべっています、見えますね。右側にいて、そしてこれから延々としゃべるといふか、もうしゃべっていますけれども。池田さんは、奥の画面で言うと左側の方にいるのです。これ実は我々から見ると右側の方にいるのですけれども、映像が逆に映っているのです。だから、私の右隣は本当は谷藤委員なのだけれども、逆に映っているということで、この画面を見てしまうと何か変だなと我々は思うのですけれども、リモートの向こう側の人はこのままでもいいのかもしれない。

ということで、今見ているところの左側の奥の池田さんがこれからたくさんお話しされると思いますので、一体どこからしゃべっているのかと思ったら、あそこにありますということをお願いします。

(4) 分野別実感の分析について

○吉野英岐部会長 それでは、令和4年の意識調査の結果がまとまっているということで、それについて今後御説明をいただくことになると思います。議事で言いますと(4)の分野別実感の分析についてということで、それでは資料3以下を使って事務局から御説明をお願いします。

調査統計課の職員さんがこっち側にいます。

○千葉調査統計課主任主査 今年から調査統計課に参りました千葉と申します。よろしくお願いします。資料3について座って説明させていただきます。

それでは、資料3、令和4年県の施策に関する県民意識調査結果(概要)について説明いたします。こちらは来週23日の月曜日に公表予定の県民意識調査の速報結果について、分析部会に関係する部分のみ情報提供させていただくものとなっております。

こちらの調査目的としましては、いわて県民計画に基づく県の施策について県民がどの程度重要性を感じて、どの程度満足しているかを把握するものです。平成12年から実施しておりまして、今回で20回目となっております。

調査対象は、県内に居住する18歳以上の男女で5,000人をサンプル抽出しております。

調査時期としましては、今年令和4年の1月から2月になっております。

回答者数は3,324人、有効回収率は66.5%となっております。

属性別の回答割合としましては、例年とほぼ同じ割合となっております。

あとこのデータの説明なのですが、分析部会用の分析データにつきましては単純集計結果を用いているのですが、県民意識調査の速報等の公表データでは、居住地による母集団拡大集計を行っておりますので、今回提供したデータと23日に公表されるデータとは若干ずれが生じております。

中身に入らせていただきます。2ページ目ですが、幸福についての分野別実感ですが、こちらにつきましてはR4調査の平均値の高い順に整理をしております。令和4年の調査結果としましては、「感じる」、「やや感じる」を足した割合が高いのは「自然に恵まれていると感じますか」の81.3%、「家族と良い関係がとれていると感じますか」の69.1%、「お住まいの地域は、安全だと感じますか」の62.8%で、上位1から3位含めて全体的に例年と同じ順位となっております。

次、3ページ目にいきます。主観的幸福感です。令和4年調査では「幸福」、「やや幸福」と感じている割合は合わせて56.7%、参考のところの平均値ですが、3.51となっております。

次、4ページ目です。幸福かどうか判断する際の重視事項です。こちらは、R4調査の回答割合の多い順に整理をしております。R4の調査結果につきましては、1、健康状況の75.0%、2、家族関係の71.9%、平成31年調査から令和4年調査において1位、2位は同じ順位となっております。3位の居住環境というのは前回4位だったところが、今回3位となっております。現在3位の自由な時間、充実した余暇も今回4位となっております。全体的に順位は例年と同じとなっております。

次、5ページ目です。身近な周りの人の幸福等ですが、「感じる」、「やや感じる」の割合が高いのは「安定した日々を過ごしていると感じますか」、「人に迷惑をかけずに自分のやりたいことができていると感じますか」となっております。全体的に傾向としましては、例年と同じというふうになっております。

次、6ページ目にまいります。こちら、つながりの構造、考え方についてお伺いしている問4ですが、こちら6ページ目は近所とのつき合い、つき合っている近所の方の数が記載されております。こちら4-1、4-2とも傾向は例年と同じとなっております。つき合いがある割合や近所の方と面識・交流がある割合等につきましては、令和3年調査からは両方とも増加というふうになっております。

次、7ページ目です。こちらは、友人、親戚とのつき合い程度と各種活動、地縁的な活動と各種活動への参加について記載しております。こちらにつきましても、傾向は例年と同じとなっております。また、「つき合いがある」とか「活動している」という割合につきましては、令和3年の調査から増加というふうになっております。

次、8ページ目です。お住まいの地域に対する実感ということで、「地域への愛着を感じていますか」ということをお伺いしております。こちらにつきましても、傾向としましては例年と同じとなっております。また、「感じる」、「やや感じる」割合については、R3調査から増加しているというのも同じとなっております。

では、次に9ページ目になります。こちらは、新型コロナウイルス感染症の影響につい

てということで、問いの項目の順番に整理をしております。グラフの右にあります「よい影響」は「よい影響を感じる」と「ややよい影響を感じる」のパーセンテージを足した数を記載しております、「よくない影響」につきましては、「良くない影響を感じる」と「あまり良くない影響を感じる」の割合を足したものとなっております。

すみません、1つ数字の訂正ありまして、①—2のころの健康のR4のよくない影響なのですけれども、こちら44%となっておりますけれども、42%でしたので、訂正いただければと思います。

令和4年の調査結果としましては、全ての項目で10ポイント以上よくない影響の割合が令和3年の調査より減少しております。

最後ですけれども、次のページ、「県民意識調査」分野別実感の時系列分析結果（基準年比較）、平成31年比較となっております。こちらにつきましては、t検定を行って、5%水準で有意な変化が確認できたものを網かけと矢印で表記しております。令和4年、当該年度の12分野のうち上昇は4分野、下降は5分野、横ばいは3分野となっております。下降した5分野は上から順に「余暇の充実」、「地域社会とのつながり」、「地域の安全」、「仕事のやりがい」、「必要な収入や所得」となっております。上昇の4分野は、上から順に「心身の健康」、「家族関係」、「子育て」、「子どもの教育」というふうになっております。

資料3の説明については以上になります。

○池田政策企画課特命課長 それでは、続きまして補足調査の方の御説明をさせていただきます。資料4を御覧ください。

資料4、補足調査につきましては、当初600人を対象ということでやっております、現時点では591人を対象として調査を実施してございます。調査時期におきましては、県民意識調査と同じ時期で実施をさせていただいてございます。回答者は549名ということで、有効回収率が92.8%ということになってございます。各属性の状況につきましては、下の表にお示しをしているものでございます。

2ページ目を御覧ください。こちらのほうにつきましては、分野別実感の状況ということをお示しさせていただいてございます。「自然のゆたかさ」、「家族関係」、「地域の安全」、「住まいの快適さ」、「仕事のやりがい」ということで、上位の方につきましては県民意識調査と同様の動向で動いているということになります。

3ページ目です。上を御覧ください。こちらの方につきましては、主観的幸福感、どの程度幸福だと感じていますかという御回答に対しての実感平均値をとってみると3.75点ということで、昨年に比べて若干数値としては低くはなってございますけれども、大体横ばいかなというような状況で推移をしているというものでございます。

次のページ、4ページを御覧ください。4ページの方につきましては、幸福と判断する際に重視した事項は何ですかということで確認をしたところ、家族関係、健康状況ということが上位で推移してございまして、こちらの方につきましては例年と同じような動向ということになってございます。

補足調査として、県民意識調査と違うところで最も重視する事項は何ですかということで、1個選択をさせていただいてございます。こちらのほうにつきましても健康状況が1位、家族関係が2位ということで、ほかに比べてかなり高い数値で推移しているということに

なります。

以下生活全般のところも聞いてはいるのですが、補足調査のところといたしましては、9ページを御覧いただいて、先ほど県民意識調査の方でもお話のありました新型コロナウイルス感染症の影響による実感の変動ということでお示しをしております。「心身の健康」については今年からですので、1年分しかないのですけれども、それ以外のところについては昨年との比較が可能となっております。県民意識調査ほど顕著ではないのですけれども、やはりこちらの調査におきましても各分野において「よくない影響」と答えている方の割合が大分減ってきているというような状況にあります。当然分野によるばらつきはかなりございますけれども、そういった傾向は同様の傾向で見られるというふうにご覧いただけます。

これを回答するに当たっての御意見を今回集めてございます。昨年との違いは、それぞれの関係する分野別実感もあわせて御回答いただいておりますので、それにあわせたような整理を次のページ以降のところでもさせていただいております。「よい・ややよい」と答えた方の回答理由というところで、例えば①ということで「心身の健康」に関連するところでマスクの着用によるインフルエンザ等の病気にならなくなったというような御意見をちょうだいしたりしております。

あとは、医療機関など、こちら仕事のやりがいとか収入みたいなどころでは、医療機関なので忙しさはあるが、やりがいを、将来安定する職業の中で安心した面もあるというような御回答、もしくは半導体事業により忙しくなったなどなどの御意見をちょうだいしております。

どちらでもないという御回答も何点かいただいております。「心身の健康」絡みでいえば、外に出る機会が減ったことによって、自分の時間を十分とれるようになったものの、逆に出られなくてストレスもたまりますというようなところもあったり、もしくは外に出てもあまり友人と長く話すことがなくなりましたというようなことなどが御意見としてちょうだいをしております。御回答されたほとんどの方は、やはり「やや良くない・良くない」というネガティブな評価をされた御意見がかなり多数を占めてございますので、このところについてももう少し注目しながら見ていく必要があるのかなというふうにご覧いただけます。

こちらのほうにつきましても、やはり従来の行動制限というようなところによる不満というのですか、ストレスとか、こういったよくないという感情を抱いていらっしゃる方が結構いらっしゃるかなというふうに思いますし、マスクの着用そのものとか、もしくは感染することへの心配、恐れというようなものが出ているということもございまして。

あとは、やはり一番多いのはどうしても行動制限の部分もございまして、余暇の関係も含めて行動制限というところはいまだあるのかなと。こちらの調査につきましては、岩手県の当時の状況を見ますと大体中旬ぐらいまで、1桁ぐらいのコロナの新規感染者が出ている状況で、後半に向けて少しずつ増えていって、24日、25日ぐらいから100人ぐらいまで増えていったというような時期の御回答ということになります。

あとは、地域活動なんかのところについてもやはりイベント、修学旅行、スポーツ、地域活動、こういったようなものが中止になっているという現状については、昨年と変わらずまだ続いているというようなことが影響として出ているということになります。

14 ページ、最後のところについては「仕事のやりがい」や「必要な収入や所得」のところでお客さんが減った、収入も減ったというようなこととか、あとは当然それに附随して人が集まらない、収入が減少して、ボーナスも減ったというような様々な御意見をいただいています。また、米、牛肉がはげないといったような実態に即したような御意見も様々いただいているところがございますので、こうした御意見を踏まえながら追加分析の方を進めさせていただければなというふうに考えているところがございます。

事務局からは以上です。

○吉野英岐部会長 ありがとうございます。資料3と資料4を使って調査結果のまず御説明がありました。例年やっている調査で、資料3の方がいわゆる5,000人の調査です。実施時期を確認しますと、資料3も資料4もどちらも大体1月から2月で、年度ではなくて年という表現していますので、令和4年、今年の1月と2月に両方ともやっている調査結果であると。基本はその前の年度、その前の年度も同じ時期にやっているということで、1月、2月というのがどういう時期かというのも念頭に置きながら聞いていただければなと思いました。

それから、全体の5,000人調査の方は、有効回収率が大体66.5%、3分の2ぐらいで、これは大体どうなんですかね、前年度と比べても。回収率そのものがそんなに動いてはいないと。

○和川央委員 去年が7割ぐらいでちょっと高かったのですけれども、大体毎年6割強ぐらい。

○吉野英岐部会長 ですので、ぐんと回収数が落ちたということはないということですね。一応それ確認したいと思います。3,000人以上の方が答えてくださっていますので、それなりに確度が高い情報がとれるのではないかということですね。ただ、この資料3の1ページ目を見ると、どうしても女性よりは男性が少なめに答えているということで、43.3%の男性に対して56.2%が女性ですから、ちょっと女性が多い。

それから、年齢層的に見ると60代以上の方がもともと割合が高いとは思いますが、60歳以上、70歳以上足すと5割を超えますので、県民の平均的な年齢構成から見るとやや高めの方にお答えいただいているというふうになるかなと思って見ておりました。

一方で、資料4はいわゆる補足調査と書いている、600人調査と我々は思っているものなのですが、御説明がなかったかもしれませんが、県外に出たりして答えることができなくなったとか、しなくなった方がいるので、最初600人だったと思いますが、今は591人が母数になっているということですね。ただ、非常に回収率が高いので、549人答えていただいている、だから男女比率もほぼほぼ半分ぐらいずつになっているということと、高齢者の60歳以上の割合も5,000人調査に比べると10ポイントぐらい少し低くなるので、県民の構成を考えると補足調査の方が比較的現実に近いのかもしれないというような感じはありました。

それでもそれぞれお答えいただきまして、さらに補足調査の方は回答欄というか、意見を書いていただくところが結構ありまして、新型コロナウイルスの影響等々について書き

込んでくださっている方々がたくさんいらっしゃったので、それを後ろの方で拾って、今回はどの分野でということも分かっているのです、丸囲みの中の分野の印ですよということで、こういったことも読みながら県民の皆様がどういったところに実感に与える影響を見ているのかを分析することになると思います。

そうはいつてもたくさんこのとおり 12 分野あるので、分析の順番というのを決めなければいけないので、取りあえず課題としては分野別実感が下がってしまうということはあまり好ましいことではないので、分野別実感が下がっているところをまず先に見て、その後上がった分野もありますので、続いてそれを見ていくということで、できればなるべくたくさんカバーしていきたいということで、事務局からそういうお話もいただいております。今年の例を見ると基準年に比べて分野別実感が下がっているのは 5 分野ということで、結構あるのです。

一方で、上昇した分野も 4 分野ということで、これも結構あるということで 12 のうち 9 は上がったり下がったりしているということですので、むしろ分析する相手が多くなります。ということなので、ちょっとお時間がかかるとお思いますので、スケジュール的には今日は 11 時 50 分までお話し合いを続けまして、時間が来たら今日は途中だったとしても終わりますので、今日中に全部やることはありません。来週もう一回この委員会予定されていますので、委員会ありますので、来週その後続きをやりますので、順番に沿ってできるだけやっていこうというふうに考えております。こういったスケジュール感でやりますけれども、よろしいでしょうか。

「はい」の声

○吉野英岐部会長 それでは、実感の低下した分野の理由等々について、事前にティー委員と和川委員と事務局のほうで一定の整理があったということですので、これについて事務局より資料 5 と 6 を使って御説明をお願いします。

○池田政策企画課特命課長 それでは、資料 5 の方から説明をさせていただきたいと思えます。お手元の方に資料 5—2 ということで、各分野の詳細の時間平均値の推移をつけたものをそれぞれ御用意してございますけれども、それらを取りまとめた資料 5 に基づいて御説明の方をさせていただきたいと思っております。

こちらの方、まず主観的幸福感につきましては先ほどお話のあったとおり、大体横ばいということにはなっているのですけれども、属性別に見ていくと上昇した分野はあるのですけれども、低下した属性はないということになってございます。実感として上がりが一番大きかったのが居住年数として 10 年未満のところというようなところで動いてございます。

分野別実感で見ていきますと、「心身の健康」、こちらのほうにつきましては基準年に比べて実感が上昇しているということで、男女ともに実感が上昇しておりまして、年齢的には 30 代以上のところで実感が上昇しているということになってございます。

「余暇の充実」、こちらの方につきましては実感が低下となつてございます。こちらの方を見ていきますと 70 歳以上もしくは 60 歳以上の無職の方のところなどが実感としては下

がってきているということになってございます。

「家族関係」、こちらの方につきましては実感上昇ということになってございます。こちらの方につきましては、会社役員、団体役員さんですとか、学生、その他の方々などのところで実感が上昇しているということになります。「子育て」、こちらにつきましても実感が上昇しているということで、こちらにつきましても20代の方の実感が上昇していたり、会社役員、団体役員さんですとか、専業主婦、主婦さんなどの実感が上昇しているという状況にございます。

「子どもの教育」ということで、こちらの方につきましても上昇してございまして、実感としては20代が上昇しているということになっております。

あと居住年数とすると10年未満というところで高めに出ているかなと思います。

次に、実感が低下している、「地域社会とのつながり」ということで、こちらにつきましては昨年同様かなり幅広い属性の中で実感が低下していると思います。男女ともに実感が低下しており、40代以上の実感が低下している。広域振興圏ごとに見てみると全ての振興圏で実感が低下しているというような状況にあります。

「地域の安全」ということで、こちらの実感低下ということになっております。こちらについても70歳以上ですとか、60歳以上の無職の方々の実感が比較的低くなっているかなというふうに思います。

「仕事のやりがい」ということで、こちらの方につきましても実感低下となつてございます。こちらについては、20代の実感が下がっているということで、あとは沿岸などのところで実感が下がっているというような状況にあります。

「必要な収入や所得」ということで、昨年はここ実感が上昇していたところなのですが、今年はまた低下に変わっておりまして、こちらのところにつきましても自営業などのところでの実感が下がっているなどの状況にあります。変動のあるような属性としては、大体こういったような形での属性の推移がございます。

次のページに、一貫して低値、高値の取りまとめもさせていただいております。一貫して低値、高値につきましては基本的には昨年度とほとんど同じような形にはなっているのですが、子育てのところの20代、ひとり暮らしというところの実感の低かった、低値で推移していた属性が今年は3点を超えてきたということで、一貫して低値で推移している属性が2つほど減少したというような状況にございます。

資料5としては、大体このような形で推移をしているということ踏まえまして、資料6の方を御覧ください。こちらの方につきましては、先ほど県民意識調査の方の報告でございましたとおり実感が低下した分野と上昇した分野に分けて、先ほどの推移した実感変動に伴って実感が低下した属性などの状況の整理と、あとは6-2のお手元の方に先ほど厚い資料というお話ございましたけれども、各分野もしくは属性、今回変動した属性の部分のそれぞれの意見を取りまとめたものから整理を行った資料でございます。ですので、余暇の充実として実感が低下した属性というのは、こちらにお示したような属性の部分で低下していると。ただ、その中で年齢が高い属性で低下が見られてはいますけれども、特徴的な理由とまでの推測はできないということから、分野の中で実感が低下した人、答えた方の要因、ここでは自由な時間の確保、趣味、娯楽活動の場所、機会、知人、友人との交流といったようなことが要因として推測されるのではないかということでの統計上

の整理としてさせていただいているというものでございます。

「地域のつながり」につきましても同様に、ほかの分野と比べて全体的に差が大きく、その中でも比較的居住年数 10 年未満の差が大きいというものの特徴的というような理由の整理はできなかったため、分野の実感が低下した方の理由という形の整理から隣近所との面識、交流、自治会、町内会活動への参加、その地域で過ごした年数といったようなものがまずは理由として考えられるのではないかとということで整理をさせていただいております。

「地域の安全」ということにつきましては、こちらにつきましても 60 歳以上の無職の方の実感の低下というものが大きいのですけれども、特徴的な理由の抽出が難しいということで、分野別実感の低下の要因ということから自然災害の発生状況、自然災害に対する予防、犯罪の発生状況という形での整理をさせていただいているということでございます。

「仕事のやりがい」につきましても同様に、こちらはひとり暮らしなどの実感の低下は見えるのですけれども、そこの属性からの特徴的な理由の抽出が難しいということで、分野別の整理の中から現在の収入、給料の額、現在の職種、業務の内容、将来の収入、給料の見込み、職場の人間関係などが要因として考えられるのではないかとという形で整理をしてございます。

「必要な収入や所得」というところにつきましても自営業主の実感の低下というものが大きいとは考えられますけれども、そこから特徴的な理由の推測というのが難しいということで、こちらにつきましても同様に自分の収入、所得額、生活の程度、家族の収入、所得額ということをも理由として整理をしているというものでございます。

次のページをめくっていただきまして、同様に上昇した分野 4 分野ございます。こちらの方についても 4 分野ございます。こちらの方についても同様の整理をしてございます。属性のところから特徴的な推測というのが難しいということで、こちらも同様に「からだの健康」につきましては睡眠・休養・しごと・学業・運動などの暮らしの時間配分、健康診断の結果、こころの健康状態というのが体の要因であり、「こころの健康」としては、「からだの健康」と同様に睡眠・休養・しごと・学業・運動などの暮らしの時間配分、からだの健康状態、仕事・学業におけるストレスの有無、仕事・学業以外の私生活におけるストレスの有無というようなことが要因として考えられています。

「家族関係」ということにつきましても、こちらも同様に分野別実感の推測の結果から会話の頻度、同居の有無、困ったときに助け合えるかどうかというような点で多くの回答が寄せられておりますので、こういった理由が推測されるということでございます。子育てにつきましても同様に子どもを預けられる人の有無ですとか、預けられる場所の有無、配偶者の家事への参加というようなことが推測されてございますし、「子どもの教育」におきましても人間性、社会性を育むための教育内容、学力を育む教育内容、健やかな体を育む教育内容というような内容で御意見をちょうだいしていたというものでございます。

あわせて、すみません、一貫して高値、低値の方も御説明をさせていただきますと、こちらの方につきましては「家族関係」で夫婦のみというところでは、調査結果からは会話の頻度ですとか同居の有無、困ったときに助け合えるかどうかという要因が挙げられておりますし、「自然のゆたかさ」につきましては全ての属性が 4 点を超えておりますので、こちらについては分野別実感でこの分野としての取りまとめとして理由を整理してございま

して、緑の量、空気の状態、水というような形での整理をさせていただいております。

「余暇の充実」というところにつきましては、自由の時間の確保、知人、友人との交流、趣味・娯楽活動の場所・機会ということで、大体どこも同じような理由になっていることとございますし、「子育て」、「子どもの教育」については、どちらも子どもはいないという属性になるのですが、「子育て」の方については、1つは分からないということと、子どもの教育にかかる費用、子育てにかかる費用、自分の就業状況ということが子育てとしては理由として挙げられますし、「子どもの教育」の方といたしましては人間性、社会性を育むための教育内容、分からない、学力を育む教育内容、不登校やいじめなどの対応、図書館や科学館などの充実ということを挙げておりますし、「必要な収入や所得」につきましては会社役員、団体役員、居住年収、居住年数 10 から 20 年未満という限られた属性だけしか 3 点を超えているものございませんので、こちらの方についても分野別の理由ということからこの 3 つの自分の収入、所得、家族の収入・所得額、自分の支出額という形での整理をさせていただいているというものでございます。

詳細の方につきましては、追って分野別で御議論されるときに御覧いただく 6—2 の方で今後議論をしていただくのかなと思っておりますが、いずれ我々のところは事前の分析としてはこちらの方になりますので、事務局からは以上となります。

○吉野英岐部会長 ありがとうございます。資料の特徴を数字と文言で示していただいて、一覧表という形になっています。これ事前に聞いていただいたティー委員、和川委員から何かコメントありますか。

○ティー・キャンヘーン委員 事前は通常の分析のとおりだなと思っていたのですがけれども、今説明をしながら聞くと部会長が言ったいろんなことでちょっと色々つながりそうなこともあるかなと、後ほど。

○吉野英岐部会長 後ほどね。後ほど一人一人からまず全体についての御感想を聞いてから、分野に入っていきますので、意見を頭の中で整理する時間にしてください。

和川さんは事前にも聞いていたと思いますが、どうでしたか。

○和川央委員 ティー先生と同じように事前はどういう分析でいこうかというお話で、結果を見ていたわけではないので、今こうやって網羅的に結果を見て、私もティー先生と同じように、こういうような形になったのだなと感じているところでして、そういう意味では皆さんと同じ状態で今お話を聞いているところでございます。

○吉野英岐部会長 ありがとうございます。

それでは、今大体数字を共有できたと思いますので、これをどう見ていくかで、この後先ほど申し上げたとおり低下している分野とか、上昇している分野とか、一貫して低値、高値というのを見ていきます。主に今日出ている変化のポイントですね、平成 31 年、令和元年、2019 年と比べて変化のポイントが出ていて、資料 5 もそうですけれども、変化が上に上がっているとか下に下がっているところが色づけされているものです。

主観的幸福感というのは全体通じてというので、一番左上に資料5では3.51となっていて、これ実は去年に続いて高い方です。ポイント制にしてあるわけですがけれども、県の合計の0.08というのは基準年が3.43でしたので、3.51というのは基準年から見ると0.08ポイント上がっているということですね。ただ、変化もそんなに大きく振れるものではなく、0.1ポイントまでは振れていない。ほかのいろんな分野で見えていただいて、この0.1をすごく超えているとか、超えて大きいとか、下がっている、上がっているという、やっぱり全体の幸福実感、主観的幸福感よりも振れ幅が大きくなっている。全体で見ると0.幾つというのが多いのです、0.0幾つもあるのですけれども、0.2とか0.3というのはかなり振れているのではないかとも見られます。それがどういう人とか、どういう特徴を持っている人で、振れ幅が大きく下がっている、またはまあまあ上がっているということがこの後出てくると思います。

それでは、今一通り全体を聞いた中で、今年令和4年にやった調査結果を基準年と比較しつつ、全体的にまず御意見、御感想を聞きたいと思います。

順番としては、すみません、あいうえお順になると思いますので、谷藤委員が先なのかな。マイクがそこにありますので、まず全体の所感で結構です。お願いします。

○谷藤邦基委員 「た」があいうえお順で最初というのは非常にショックな出来事です。正直申し上げて今いろんな資料を読み込んでいる最中で、まだ具体的に自分なりのストーリーというのは、ナラティブみたいなものは出てきていないのですが、ただこの資料5のこの1枚だけ見て感じることは、基準年に比べて全体としての主観的幸福感というのは上昇している。ただ、分野別に見ていったときに「心身の健康」とか「家族関係」、「子育て」といったのが自分なり身の回りのところの指標等は割とよくなっているのですが、一方で「地域社会とのつながり」とか「地域の安全」とか、あるいはそういう外向きのところ、あるいは「仕事のやりがい」とか「必要な収入や所得」というところ、外部との接触なり何なりが必要なところというのは下がっている。ただ、それをトータルすると全体としては上がっている。そういう傾向なのかなというふうに思っています。

あと例えば「余暇の充実」のところが下がっているのです。女性が下がっていて、70歳以上の方が下がっていて、あるいは60歳以上の無職の方が下がっていてという、何かこれはお金がないとか、コロナで外に出られないとか、そういうことなのかなと思って見ていると、例えば資料6見ると一番出てくる理由が自由な時間の確保なのです。これ資料5で見る余暇の充実で下がっている属性の人たちというのは、そんなに時間に不自由するような人たちではないよなというのが直感的なイメージなのです。それが何で自由の時間の確保というのが一番の理由に出てくるのかというのがちょっと直感的には分かりにくいかなと。

何かこれほかのところもそうなのですけれども、今やっているような分析の仕方で行っていると、確実に言えるのはここまでで、これ以上は無理なのです。この先いろいろ推測というか、イメージ膨らませて考えることはできるけれども、ただそれをどうやって裏づけるのとなったときに、このアンケート調査だけでは裏づけは多分とれないので、何かそれを客観的に裏づけられるようなデータというのはないものだろうかというのをつつら見ながら思っていたところです。

例えばちょっと細かい話になってきますけれども、「必要な収入や所得」のところも前回上がって、今回下がったと。私は定額給付金の影響があるのだろうなと思っているのですが、それは何か客観的に確かめられるのかと言われるとちょっとつらいよなと思いつつながら見ていました。

ただ、この点に関して1つだけ言うと補足調査の収入階層の回答をいただいているのですが、ここが前回に比べると間違いなく下方シフトしているなという印象があるので、そんなところから何かいずれ客観的に裏づけられるようなデータをたどりながら多少なりとも推測を広げていかないと、何か読んで訴えるような分析にはならないだろうなと思って見ていたところでした。大体そういったところが印象としてあります。

○吉野英岐部会長 ありがとうございます。

すみません、順番をよく見たらタッチの差で竹村先生でした。同じ「た」なのですが、でも、「たけ」と「たに」でした。すみません、竹村先生お願いします。全体の所感で結構です。

○竹村祥子委員 上昇しているものについては、去年から気にしていたものがあまり動かないので、動向を読んで理解するにはもう少し調査が進んだ後に見なくてはいけないと思っています。1点実感が低下したというところで「地域の安全」と「地域社会とのつながり」の低下ですけれども、広域圏で見ると沿岸がちょっと際立っておりまして、「地域社会とのつながり」の問題や「地域の安全」の問題で低く出るというこの地域の差が気になっております。

以上です。

○吉野英岐部会長 地域別に今後また分析を考えていくところだと思います。ありがとうございました。

谷藤委員もう一回お願いします。

○谷藤邦基委員 今の竹村委員の御指摘、私も別な観点からちょっと気になっていまして、資料4の補足調査の結果のグラフが出たところ、資料4の3ページの部分です。幸福感の集計値が出ているわけですが、そのグラフ、折れ線グラフがいろいろありまして、右下のところには広域圏別が出ています。これ3つのグラフは、水準は違うけれども、同じ動きしているのです。ところが、1つ黄緑のグラフが違う動きになっているのです。これが沿岸広域圏なのです。

だから、県全体の分析する中で、沿岸だけは特出しで別な分析必要かなと思ってちょっと今見ていたところでした。これは、事実として見なきゃいけないということで、ちょっとここでは注目したいなと思っています。

○吉野英岐部会長 補足調査の方の沿岸の方々の答えの動きが。

○谷藤邦基委員 ええ、だから全県、ほかの3広域圏の動きと沿岸だけ違う動きしている

のです。何かあるのかもしれない。特に沿岸の場合は復興という問題もありますので、進捗度合いとかというのものもあるのかなと思ったりはしますが、私もよく分かりません。あるいは決めてかからないほうがいい何かあるかもしれない。

○吉野英岐部会長 1つ分析点も御指摘いただきました。ありがとうございます。

それでは、ティー先生なのかな。お願いします。

○ティー・キャンヘーン委員 まとまっていらないのですけれども、資料3と資料4の1ページを比較したときに、さっき部会長も言ったのですけれども、県民意識調査の場合は高齢者に寄っていて、補足調査のほうはほぼほぼ満遍なく年齢層が広がっています。職業で見ると県民意識調査の方は無職が多くて、どちらかという補足調査の方が雇用者が多いというようなイメージを受けました。ということは、さっき部会長言ったように、もしかして補足調査の方は現状に合っているのではないかなという気もいたしました。

そこで、すごく気になったのは地域との関わり、「地域社会とのつながり」はずっとではないのですけれども、最初の年度から下がり続けているのです。というのがあって、それと今見ている資料3の最後のページですが、ずっと下がって行って、でもそれに近い内容のもの、これに近いようなものに関して同じ資料6ページ、7ページあたりに近所のつき合いどうですかとなっているのです。この集計の方法というのは大丈夫かなと、つき合いがあるのにつながりが無いというのはどういうことなのだろうなど。

逆に言うと、これは何だろうね、そんなに皆さん幸福に関して地域とのつながりはあまり重要ではないのかなと、何かふわっとしているのですけれども、そんな感じがしてならないような気がしました。いっぱいあるのですけれども、大分時間がたって、ちょっと忘れてしまったのですけれども、まだコロナで入らなくてもいいかもしれない、資料3の9ページなのですけれども、この9ページ見たときに何でこれ差がついたかという、多分ですけれども、県民意識調査というのはそういうふうに年齢が寄っているがために、要するに補足調査のほうに厳しい。なぜかという、

○吉野英岐部会長 仕事が減るからね。

○ティー・キャンヘーン委員 はい。年齢の部分を見るとこの9ページの方がより近いのではないかなと思いました。ひとまずちょっと思いついたことを発言させていただきました。

○吉野英岐部会長 ありがとうございます。

続いては、山田委員をお願いします。

○山田佳奈委員 御説明ありがとうございます。私は、取りあえず今のところ大きくは3点かなと思っております。

1つ目は、もちろん分野別実感が分析の中心だということは承知しつつということなのですけれども、主観的幸福感の話もありましたので、その流れで最初に申し上げますと、

例えば資料4の3ページ目、先ほど谷藤委員さんからも御指摘ありましたところですね。属性別の主観的幸福感のところなのですが、私もちょっとここ気になりつつ、あと年代別でちょっと下がっている40代の方、気になりつつあったのですが、先ほどの県民意識調査の方ではこの主観的幸福感の属性別のグラフというのは、私見落としていたのか、あるいは今回はまだ、ということだったのでしょうか。

○吉野英岐部会長 つくればできるけれども、今の資料の中にはまだない。分厚い資料は補足調査ですよ、6-2は。

○山田佳奈委員 速報値ということで、いろいろ大変なところだと思うので、もし可能であれば

○吉野英岐部会長 どっちが作るのですか、調査統計課が作るのでしょうか、それとも政策企画課が作るのですか。

○池田政策企画課特命課長 すみません。この資料のことだと思うのですが、一元配置分散分析の結果のところをグラフにしたものを毎年資料として、去年ですと参考資料6として属性別の分析結果というのをそれぞれ出しています。これについては、例年ですと第2回か3回のところで、出来次第、皆様のところに御提供させていただくという御予定にしておりました。

○山田佳奈委員 ありがとうございます。

○吉野英岐部会長 では、次回出てくると。

○池田政策企画課特命課長 次回間に合うか。今回は来週なので、もしかすると第3回か、そこはすみませんが。

○吉野英岐部会長 1週間しかないと。

○池田政策企画課特命課長 相談してから御回答させていただきたいと思います。

○吉野英岐部会長 でも、あればね。

○山田佳奈委員 あればですけども、御無理のない範囲でお願いします。傾向が果たして近いかどうかというのをちょっと確認した方が分析もしやすいかなということで、べらぼうに急ぐというわけではないと思うのですけれども。

○吉野英岐部会長 補足調査の資料4の3ページにある6つの折れ線グラフ、6種類の折れ線グラフがあるのです。これと同じようなのが出てくると動きが確認できると。

○山田佳奈委員 そうですね。

もう一つが先ほどティー先生がおっしゃった「地域とのつながり」のところで、資料3の6ページ目のどのようなおつき合いをされているか、和川委員さんの言葉をかりれば行動のところだと思ひまして。確かにこれ全体を見るとつき合いがある方の割合としては大きな変化はないのですが、子細を見ますと、質というのでしょうか、やはり密度が変わってきている。ずっとピンクのところは少しずつ減ってきていて、挨拶程度の最小限のつき合いというのが少しずつ増えてきている。下の問4—2のところの近所の方の数というのも同じようにずっと変化してきているということで、そういうところで徐々に変化というのは現れてきているという考え方ができるかなと思ひていました。

というわけで、だからどうという話ではないですけれども、あと年代にもよるかなという気はしますので、そこをどこまで分析していけるかなと思ひます。

最後に、資料5にあるA3の資料でしたか。

○吉野英岐部会長 一覧表みたいな。

○山田佳奈委員 はい。資料5ですけれども、今回気になっているのが仕事のやりがいのところが20代の方が結構下がっている。30代の方もそうなのですけれども。あとは仕事のやりがいに対する、臨時雇用者の方が「仕事のやりがい」と「必要な収入や所得」というところで下がっているというのが属性のところでもそうなのですけれども、「仕事のやりがい」のところの資料3、4を見ますと、それぞれの数字が少しずつ下がっているように私には見えてます。非常勤の方も少しずつ増えてはいますけれども、こういったところがひょっとすると何かこの数年の影響なのか、コロナの影響ですとか気になりながら今回見ていたところです。というのも、たしかちょっと前の日経新聞に日本の仕事の関係として、例えば労働時間数としては少しずつ減ってきているということで、少しずつ労働環境としては改善の方向にいるのだけれども、でも仕事のやりがいという面では、少なくともこれはいろんな国との比較ということでいえば低い傾向が続いている。私の記憶が正しければ、ですね。そういったデータを見たこともありまして。この20代の方、あと70代の方のやりがいというのは今回気になります。

○吉野英岐部会長 ありがとうございます。まずは、全体の主観的幸福感の動きが気になるところでしたということで、データで出していただければと思ひますので、よろしくお願ひいたします。

続いては、若菜委員がちょっと早かったです、順番が。ですので、若菜さんから全体の所感についてお願ひします。

○若菜千穂副部会長 先ほどの山田委員の質問が聞き取りづらくて、もしかしたら重複してしまうかもしれないのですけれども。

では、3点ほどなのですけれども、まず資料5の増えた、減ったはこのとおりだろうなという感じはしています。私は地域づくりで集落に入っていますけれども、町内会、自治

会の活動、あとは福祉系のサロンとかがなくて、若い人たちは楽になったと言うし、年配の方は寂しいという話は聞いています。

ちょっと評価とは離れるかもしれないのですけれども、復活できるかというところが私たちの仲間では、住民活動が復活できるかというのがすごく難しく、この評価を受けて、こういうコミュニティー活動の復活はちょっと政策的にも応援をしないと多分半分ぐらい復活しないかなという実感があるので、県にはぜひ受け止めていただきたいなというのが1点です。

それに関連して、資料6で分析をいただいているのですけれども、資料6の方の推測とかまとめのところなのですけれども、もうちょっとフリーワードというか、自由記載されている回答もあると思うので、そこからもうちょっと抜き出していただいて、ここに出していただければ、ここでもああ、そうだよ、コロナの影響についてはすごく自由回答があるので、イメージつきやすいのですけれども、これについてももちろん全部とは言わない、抜き出していただいていいのですけれども、多少でも書かれた県民の方の生の声があると大分理解しやすいなと思いますので、任意になるから抜き出しが勇気が要ると思うのですけれども、多いのとかでもいいので、多少何か資料をいただくと、さらに深まったかなというのは思います。それが2点目です。

3点目なのですけれども、資料4の4ページなのですけれども、幸福かどうか判断する際に重視した事項は何ですかと、これ物すごく面白い質問だなと思っていて、1番が家族で2番が健康、今回上がったところですよ、実感としても上がったところなので、それで全体的に増えたのだろうなということで、重視されているものはより重視すべきだと思っています。

私も仕事柄、地域コミュニティーはどこかという、もちろん後ろのほうに近くて、そういう意味でいくと今回下がった「地域社会とのつながり」は想像どおりですけれども、それほど幸福の実感には重視されていない部分ではあるので、この資料4の4ページの何を重視しているのかということと、改めてなののですけれども、何を重視しているかというバランスと、今回の増えた、減ったというのは、やっぱり突合しながら見ていくべきだな。もちろんつながりを高めたいというのはあるのですけれども、ではつながりを一生懸命高めようという政策よりは、単純にこれを見ると家族とか健康を上げてしまった方が幸福感というのは上がるよねという、そういうところも、そのとおりにする必要はないのですけれども、政策的にどう考えるかということで単純にそれぞれの項目が上がった、下がったというのと、一県民から見て私たちは重視しているのは、実はここよという、そこは両方バランス見ながら見ていかなければならないのだなというのは改めて思ったところでした。

私からは以上です。

○吉野英岐部会長 ありがとうございます。最後の幸福感の実感に判断する際に重要視している事項が補足調査にもありますし、全体の5,000人の調査ですね、県民意識調査の方にもあって、大体同じような傾向を示しているということから若菜さん自身のお考えでは健康や家族というのが大分影響が強いので、ここが高値であれば幸福実感全体は変わらないだろうなと。

ただ、一方で地域コミュニティーなんか下がっているにもかかわらず、幸福実感全体下がらないということの影響力というか、重視度が比較的他項目に比べて下の方に来ているので、大きな直接的なダイレクトなインパクトが幸福感に出ないのではないかと。それは、治安防災なんかも結構下の方にいるので、ここ大事なところなのだけれども、幸福感に作用しているかということとあまり大きくないかなと、その辺もきちんと分析していくことも今後必要となると。ありがとうございました。

では、和川委員お願いします。

○和川央委員 ありがとうございます。皆さんのお話を聞いたら幾つか増えてきまして、5項目ほどお話をさせていただきます。

まず、主観的幸福感、動いていないなと思ったのですけれども、資料を見ましたらポジティブな人が増えています。ネガティブな人も増えています。結果として平均値はあまり変化しなかったのだとわかりました。以前に谷藤委員が研究会でお話しされていたのを覚えているのですが、平均値だけで議論すると見えなくなるのがありますよねと指摘されていたのですけれども、平均値だけ追っていくと見失うものがあるかなということで、分野別実感が動いているのだけれども、幸福感が動いていないから分野別実感幸福感に全く効いていないかということ、実は様々なものが動いていて、平均化されている可能性もあるのだろうなというのを感じました。

2つ目に、資料3の時系列で載っている一番最後のページを見ながら、今まで基準年と当該年度2か年の差をずっと見ていて、私もそれでいいと思って見ているのですけれども、ただ例えば「地域社会とのつながり」、「余暇の充実」は今年下がったのではなくて、令和2年にくんと下がり、継続しているわけですね。なので、もしかしたら今年の課題ではなくて、もう令和2年の課題を引きずっているだけなのかなとか、あるいは「地域社会とのつながり」とか「余暇の充実」なんかは今年だけの分析をするとコロナだよねと思うのですけれども、実はコロナ前から下がっていて、これが継続しているのだねとか、今年度だけで理由を比較するのもすごく重要なのですが、この2、3年どうだったのかということを見ながら、理由が同じなのであれば課題とすれば継続しているとか、ずっと低いだけだけれども、理由は変わっているのだとまたちょっと違った課題が見えてくるのではないかと思います。理由を経年で見ながら今年度を考えてみると、もしかしたら違った気づきがあるかなと感じましたというのが2つ目の意見といいますか、感想なのです。

3つ目は、これは今後の課題ということになるのですが、谷藤委員からこれだけ見ても分からなくて、やっぱりいろんなデータを見なければいけないねと発言がありました。僕もそのとおりだなと思っています。今使われていない意識調査の中で、属性の収入とか、余暇の時間とか、使われていないところがあるかなと思っています。今は、分野別実感の中だけを様々切り刻みながら、細かく切り刻みながら要因を探る作業をしているのですが、それだけではなくて横にあるものをリンクさせながら見ていくという作業も、今年でなくていいと思うのですけれども、今後の課題としてそういうやり方も考えていってもいいのかなと感じましたというのが3点目になります。

あと4点目として、地域コミュニティーが効いていないね。なので、近所づき合いはあまり幸福感に関係ないのではないかという話がありまして、それに対してちょっとだけ反

論をさせていただくと、まず研究会では地域コミュニティーというのは重要だよねということで、幸福感をポジティブにさせるものだと、顕在化しているものではなくて、じわっと効いてくるものだというお話があったと思います。何が言いたいかということ、例えば自然環境とか治安というのは下にあるのですけれども、重視するものとしては順位が下にあるのですが、当たり前だと思っているものというのは、幸福感が顕在化、表面化しにくくて、例えば水が蛇口から急に濁って出てくると、多分すごく幸福度が下がる一方で、きれいな水を飲んでいるのは全然幸福感には影響しないけれども、水が濁れば幸福感が下がるとか、やっぱりそういうのもあるかなと思いますので、一概にソーシャルキャピタルは効かないという判断ではなくて、そこを議論するのであればもう少し突き詰める必要があるかなというふうに感じましたというのが4点目になります。

最後、5点目はこれも今後の課題なのですが、基準年から離れながらも3年たって議論していると基準年が非常に重要なのだなと思ってきて、これも何が言いたいかという評価の観点で1年だけのもので比較しているのですが、意識というのは結構上下するのであればもしかしたら平均値とるとか、そういったことも今後基準年を考えることも、これは評価とどうつながるかにも関わるので、あくまでも正確な分析をするためにはという意見なのですけれども、実は下がった理由は基準年が異常値だったからですということがないようにする必要が、こんなに上下すると当時思っていなかったというのものもありますけれども、というのをちょっと感じました。

すみません、長くなりましたが、以上になります。

○吉野英岐部会長 ありがとうございます。点数間のつながりというのでしょうか、与える影響なんかをどういうふうに読むかというのが、いろんな見方があるのではないかという話と、今あるものを当然だと思って普通は感じないのだけれども、なくなると急にこれは大変なことになったという影響なんかも数字に出てくる可能性がある。その辺どう見るか、あとは基準年、その後の状況をどう見るかということと、県民意識調査については幸福のところ以外にいろいろ効いているのがあるので、そういったものとの関連性なんかも見るといろいろやることはあるというようなことを伝えていただきました。ありがとうございました。

私もちょっとだけお話いたしますと、いろいろありましたけれども、資料の順番でいくと資料3で、今、和川さんがおっしゃっていた最後のページで4年間分の平均ポイントとその上下が出ていますけれども、「余暇の充実」というのは低いですよ、意外と。結構時間があるはずなのにとかですね、仕事しなくていいのにとかと思うのですけれども、「余暇の充実」は意外と低いのですけれども、「仕事のやりがい」というのが意外と高くて、ちょっと下がるはいますけれども、3.4台とか3.5台となっていて、ほかの数ある分野を見ても3.5まで届くというのはあまりなくて、「家族関係」とか、「地域の安全」とか、「自然のゆたかさ」とかですかね。そうか、そんなに「仕事のやりがい」を感じる人がやっぱり多いんだというのを改めて思うけれども、では「必要な所得や収入」があるかということ、これまたずっと低くて、やりがいはすごく感じているのだけれども、リターンがないというので、よく実感が落ちないよなと思うぐらい、乖離がすごくあって、実はこれ両方高ければそれはすごくいいことなのですけれども、「仕事のやりがい」がこれだけ高いというの

は何でなのだろうというのはちょっと、「余暇の充実」はこんなに低いです。ちょっと気になりました、今見ていました。

最後の資料5の青、だいたい色の一覧表で、全体調査ですけれども、ここの青の数が基準年と比べて低下している分野の数が多いというのを見ると、年代でいくと70代以上の方が人数も多いですけれども、青の数も6項目、6分野くらいありまして、「心身の健康」、黄色は1個しかない。6分野下がっているのは、やっぱりこのカテゴリーだけなので、しかも1,000人以上いるということを考えると、高齢者に影響が出やすいのか、高齢者がすごく敏感なのか、ちょっと分からなかったのですけれども。感じる力が強いのか、どうしても悪い影響が出やすいのか、何にも言えませんが、非常にここ多く出てしまっているの、何で高齢者にこういった実感の低下が起こっているのかということも、横断的にも見ていく必要があるかなと思いました。

「仕事のやりがい」は、特に0.28ポイント下がっているところをみると、70歳以上の仕事のやりがいというのは具体的にどういうことなのだろうかと、自営業の方で例えば農業、水産業等々も含めると、もしかしたら所得や収入には反映されにくいけれども、一生懸命やってきたことが、だんだんやりがいが感じられなくなってしまうと、将来的にはかなり厳しい状況もあるかなとか、あるいはいわゆる常勤雇用でない形で働いていらっしゃる方々に、やはりやりがいが落ちていることになってしまうと、そのあたりをどうやって手当てするのかということが、少し高齢者のデータを見ると感じました。

それから、一番最後の広域振興圏別のデータもあって、ここもさっきちらっと出た沿岸ですね、沿岸のデータが5分野で青、マイナスで、実は上がっているところはないのです。通常であれば「心身の健康」はちょっとぐらい上がってもおかしくない。しかもほかの3つの地域は上がっているにもかかわらず、ここでも沿岸は上がっていませんし、主観的幸福感も上がってはいない、バーになっている。一方で、マイナスが5分野もあって、特に「地域社会とのつながり」なんか0.3ポイント下落ということですから、0.3まで下がるという主観的幸福感の動きの3倍ぐらい下がっているということですから、かなり振れ幅が大きいかなと思っています、これどこも下がっているのですけれどもね。やっぱり広域振興圏別にいろいろ政策を打っている、今後打つと思うのですが、その場合横並びの政策をするというよりもどこに重点を置いて地域別の暮らしを支えていくかというの、もいづれ次の計画の中では考えていくと、こういったデータがありますよと、なぜ沿岸でこういったことが起こるのかということ、それをあわせた対応はどうしたらいいのかということも考えてもいいのではないかなと思っています。これが客観的データ、これは意識なので、主観的なのですけれども、何か定量的なデータと連関しているのであれば問題もあるし、それから震災から12年ということを考えていくと、いろんな意味で関心の低下や投資の低下等々があって、一方で整ったインフラをどう使っていくのかというような課題も残っているはずで、インフラ不足というわけではないと思うのですけれども、しかしなかなかそれが実感として県民の皆様にもいろんな分野で認識されないとなると、かなり投資していろいろ回復、復旧していますので、これが評価をいただけるような仕組みも作って、長続きするような地域になる必要もあるのではないかなということも考えて、年齢や地域についての差が出ているということも分野横断で見たいというふうに思いました。

長くなってすみません、私からは以上です。

ティー先生。

○ティー・キャンヘーン委員 事務局にちょっとお聞きしたいのですが、さっき和川委員が言ったように資料3の最後のページで基準年自体が異常な可能性もあるのだという話が多分されたと思うのですが、その一覧、もうちょっと前のデータはあるはずなので、それを一覧として、参考資料としてすぐ出せるようなものでしょうか。要するに、H31より前の。

○池田政策企画課特命課長 お手元の資料5-2の一番最初のページが主観的幸福感になっていまして、調査を始めた28年から。

○ティー・キャンヘーン委員 5-2。

○池田政策企画課特命課長 5-2です。それです。

○ティー・キャンヘーン委員 全体の。

○吉野英岐部会長 分野別みたいなやつ。これはないんだね。

○ティー・キャンヘーン委員 後ろです。ありがとうございました。

○吉野英岐部会長 ありましたか。全体の幸福、そうか、これ平成28年から分野別もとれているのですね。ちょっとバックできると、平成31年の基準年が、それほど変な値ではないと。

○池田政策企画課特命課長 「自然のゆたかさ」だけが29年からになっていたはずで、それ以外は多分28年からとれていたと思います。

○吉野英岐部会長 では、過去3年間見れば数値の適切さなんかも判断はできるということでティー先生いいですか。これまた後で。

○ティー・キャンヘーン委員 どうなのかなと思って、「地域社会とのつながり」は、やっぱりその前も高かったということが分かりました。

○吉野英岐部会長 ありがとうございました。

一通り御意見聞きましたけれども、もう一言言っておきたいことありますか。どうぞ。

○池田政策企画課特命課長 様々御意見をいただきまして、ありがとうございました。ち

よっと資料の確認という意図も含めつつ、簡単に御説明をさせていただきたいなと思っています。

1つは、谷藤先生の方から「余暇の充実」のお話ございました。余暇のところの内訳、資料4の中には内訳として、さっき和川委員からもお話がございましたけれども、余暇時間の内訳を少し入れてございます。今年のものを見ると何となく介護の時間がぐっと増えてきたり、仕事の時間が減ってきたりというのが、ページ番号が落ちてしまっていますが。6ページですか、すみません。6ページのところに内訳を整理してございます。グラフで表しております。

○谷藤邦基委員 確かに介護の時間は急増していました。

○池田政策企画課特命課長 はい。こういったようなものをこれからの審議の参考としていただければなというふうに思っておりますし、もしそれ以外でも何か必要なものというのがあればぜひ御意見をちょうだいできればなと思っております。

あと若菜委員の方からお話のありましたフリーワードの話ございました。こちらの方につきましては、厚い資料の各分野の一番最初が分野の実感なのですが、これめくっていただくとフリーワード、コメントを入れてきた方のところについては、表の下のところに整理をして追加してございますので、資料6の各分野の最初のページが分野の実感の整理なので、6-2の最初ところです。各分野の最初のページの裏面にフリーワードが書いていますので、こちらの方もこれからの御審議の中で参考としていただければと思っておりますし、あと和川委員の方からございましたように各属性につきましては、当然そういったお話になるものと思って、我々としても実感の変動のあった属性のものは全てお付けしたのがゆえにこんな厚い資料になってしまっているの、ぜひ検討の参考としていただければなと思います。例えば、先ほど谷藤委員の方から60歳以上というところについて、自由時間の確保というのはどうなのだろうというお話ございましたけれども、お話のとおり70歳以上の方の感じない理由などを見ますと、自由時間の確保というのは入っていないということになりますので、こういったものをこれからどういうふうに解釈していくのかというところをこの部会の中で御意見をちょうだいしていただければなというふうに思っているところです。

あとは沿岸の話についてはそのとおりで、今回の傾向を見ていると割と沿岸と県央が若干実感とすれば下がる傾向にあって、県南と県北が実感としては上がっているところは上がっているように見えてしまうというところもありますので、沿岸の部分についてはもし何か分析として差し込んでいけるものがあればあわせて御意見をちょうだいしたいなと思っております。

以上です。

○吉野英岐部会長 ありがとうございます。

谷藤委員どうぞ。

○谷藤邦基委員 具体的なデータとしてお話しできる話ではないのですが、今吉野部会長

から沿岸で特に「地域社会とのつながり」のところが低下しているという話があって、私は復興の方にも関わっているものですから、復興の方の委員会でどういうことが問題になっているかという、数ある問題の一つということなのですが、要は災害公営住宅に皆さん入居されるようになった結果として、従来のコミュニティーがなくなってしまっているという話になっているのです。どうやってそこを再構築するかというのは非常に大きな課題になっているという状況がありますので、そういったこともここに影響しているのかなと思って聞いていました。具体的に数字でどうこうと言える話ではないのですが、いずれもともとあった隣近所のコミュニティーというのが災害公営住宅に移ったら、もうそれが全然なくなっていると、隣の人も誰か分からぬというような状況。そこから今やり直しているような状況で、なかなか難しいところがあると言われていました。

以上、参考情報として。

○吉野英岐部会長 復興の過程でできてきた住宅形態がほぼ完成したのが随分後で、大体今から三、四年ぐらい前にほぼほぼ完成して、そこからスタートになっているので、むしろ事態が顕在化しているのはここ数年間、復興が随分経ってからですよ。確かにそういう住宅形態というのは、ほかの地域ではあまりありませんしね。被災した方がいっぱい入っています。そういったのがあるかもしれません。ハードが整備されたとはみなさんおっしゃいますけどね。ありがとうございました。

山田委員どうぞ。

○山田佳奈委員 今皆様の御意見いろいろ伺っていて、それであくまでも意見の一つということでお聞きいただければと思うのですが、横断的ということですか、時系列という幾つものキーワードが出てこられたところは私も賛成です。冒頭でお話が出ましたように今回皆様おっしゃってくださって、ティー先生おっしゃいましたように今回で一つの区切りというのですか、アクションプランですか。今まではコロナの影響がどういうふうになるか分からないので、まずは見ていこうと、何年かとってみなければ分からないよねということで、ひとまず来たと思うのですが、ここがもし一つの区切りだとすれば、先ほどティー先生もおっしゃったように、和川委員さんですね、平成31年前からの流れの計7年、8年ぐらいのトレンドで見たときにどう見えるのか。そちらで見て、それらの属性で輪切りにしていくといたしますか。先ほど若菜委員さんがおっしゃったように、若い世代の人にとっての「地域のつながり」と、年配の方のつながりというのと意味合いが違ってくるのを大きく分析は難しいなというのを、谷藤委員さんがおっしゃったように理由を推測するのは結構きついなというのが私は感じてきたところではあります。

ですので、せっかく資料6の形で平成31年調査と令和4年調査の比較ということで、原案については出していただきましたけれども、場合によってはこれまでの蓄積を踏まえての、今回は少し形態が違う形の分析というのを、できるようになったのかなという感じで今印象を受けておりました。すみません。所感ということになります。

○吉野英岐部会長 ありがとうございました。5,000人調査の方で見れば、各分野別も7年分ぐらいはデータがあるということですかね。時期的な真ん中ら辺が基準年ですね。基

準年より前にデータを見積もっていて、基準年より後にデータ見積もってということで、確かに少し広く見ていけばもうちょっと動きも見えるということもお話聞きながら分かりましたね。あとどうその評価するかということもありますけれども、基準年と今年度だけ見るというわけではなく、せっかくデータがそろっているところなので、基準年そのものがどういったところに位置づいていたのかということも資料が出て、もうあるのですけれども、これ読みこなしていくとかなり新しい発見が出るかなと思いました。

ということなのですが、まずは低下した分野についてちょっと一旦さらっとおさらいをしてから、あとまた全体議論の方に戻していきたいと思いますので、低下した分野を少しまた詳しく見ていきたいと思います。これ資料5で見ていけばいいですか、低下した分野がどれかというのは、資料5の青い色がついている項目の分野を見てくださると「余暇の充実」と、「地域社会とのつながり」と、「地域の安全」と、「仕事のやりがい」と「必要な収入や所得」が基準年に比べて令和4年は低下しているという数字が出ています、県平均のところですね。これを少し詳しく見ていって、属性別で見たのが下につながっている切り口ですね。切り口で見ると、この部分の人たちが特に落ちていると、数字が大きくなったり小さくなったりするということです。

この「余暇の充実」については、事務局としては何かありますか、意見というか。

○池田政策企画課特命課長 そうですね、資料6がベースとしては整理をしているものでございますので、ちょっとこちらを踏まえつつ、このところに先ほどお話があった資料5の下がった属性も書いてございます。推測される要因というのがありますので、それと資料6にある各下がった属性のところには理由の分布とか、そういったものを御覧いただきながら分析を進めていただければと考えております。

○吉野英岐部会長 ありがとうございます。ここね、しかももともと低値なのです。下がっているだけではなくて、数字自体も低いのです。「余暇の充実」ね。だから、数字も低いのも何とかしたいのですけれども、それが下がっている、さらに下がっているということで、この下がった属性を資料6の一覧表の左の上のほうで見ると県民意識調査全体では女性70代以上、60歳以上の無職、夫婦のみ、居住年数20年、確かに年齢が高いから居住年数が長いですね、沿岸と県北部ということと、理由はちょっとよく分からないということですが、補足調査から見てこの分野が低下した要因と回答したのは実感からは、自由な時間の確保、趣味娯楽活動の場所・機会、知人・友人との交流、コミュニケーションの場所とか相手ということから、この資料6の段階ではこういったまとめのところですね、3つの理由が推測されると。時間、機会、相手、これがそろっていないということで、充実感が低下したということですね。これについては。

○小野政策企画部長 補足調査の1ページ目の裏側のところに自由記載、「実感が低下した」のその他のコメント等ございますが、これも参考になるかなと思います。

○吉野英岐部会長 資料番号で言うと。

○池田政策企画課特命課長 6—2です。

○吉野英岐部会長 6—2ですね。

○池田政策企画課特命課長 はい。

○吉野英岐部会長 資料6—2にも補足的内容が載っていますので、そこを見てください。先ほど谷藤委員からも時間の問題だけではないんじゃないのというようなお話もありましたね。何か御意見ありますか。

どうぞ。

○谷藤邦基委員 先ほど池田さんからもちょっとありましたけれども、例えばいかにも高齢の人たちが属性としては出てきているのですけれども、例えば資料6—2の「余暇の充実」のところの属性別の数字見ていると、女性は確かに自由な時間の確保というのはあまり感じない方で1番に出ていますけれども、あと70歳以上とか60歳以上の無職とかという部分の人たちというのは、特にネガティブな項目の方の指標としては出てきていないのですよね。どう考えたらいいか、ちょっと難しいなど。だから、並べてみるとこのとおり、分析の手順として並べてみるとこのとおりなるのだけれども、これだけ見て高齢者の人たちの自由な時間の確保に難儀しているのという、こういうことではないよねとなってくるのですよね。

実はこれを見たとき私が想像したのは、高齢の方々が介護が必要なほど弱ってきて、そもそも時間の確保ができなくなったのかなど。だから、逆に言うと1日の行動時間の低下とどこかで出ていましたよね。あれで介護が急に増えているというのは確かにあったのです。6時間だったのが30時間に増えていたのかな。だから、そういうことなのかと思うけれども、この属性別の分析を見るとそうでもないよなということになってきて、今私の頭の中は非常にカオス状態です。何か合成の誤謬ではないけれども、ちょっとこれミスリードしかねないですね、このままにしておくと。

○吉野英岐部会長 部長、どうぞ。

○小野政策企画部長 場合によると、おっしゃるとおり補足調査結果からの推測は、これは全般的なところを載せているので、これが理由かなというふうに思うのですけれども、実は左側の属性分析を見れば女性であり、70歳以上だということ、そこが特に実感が低下した属性だというふうに特定しているのであれば、その理由として推測されるものをこっち側に書いていかないといけないのでしょうかね、多分ね。ですから、それが全体ではないのだけれども、どこにターゲットを当てていくかというところをどこかで絞り込んで、その理由は何なのかというのをどんどん寄せていくというのも一つの手法なのかもしれないと思います。

○吉野英岐部会長 どうぞ。

○**谷藤邦基委員** いずれそういう考え方でいいと思います。要は、出発点としてはここまで手順としてはこうなったというところで、今言ったような疑問点を追及していくとどうもこれは自由な時間の確保というのをそのまま上げておくのはちょっとまずいかもねという判断が出てくると思うので、いずれその辺見ている常識的にちょっと違うんじゃないのというのはまずちょっとチェックかけていく必要があるのかなと思って見ていました。

○**吉野英岐部会長** ティー先生はいかがでしょう、この余暇の時間は、「余暇の充実」で実感が上がらない。

○**ティー・キャンヘーン委員** 何となくですけども、資料の5-2の「余暇は充実していますか」というのを眺めてみると、その前は隔年で上がったり、下がったりしていて、この基準年以降はずっと下がっているのですね、70歳以上の皆さん、どうなのでしょうね。余暇が充実すれば、ほとんどの時間が余暇なので、充実していますかと言われたら、それは失礼かもしれませんが、ちょっと違うかな。どうですかね。

○**吉野英岐部会長** 充実していると答えにくい質問ですかね。そっちにつきにくい、充実していても。

○**ティー・キャンヘーン委員** 70歳以上、一日中、

○**吉野英岐部会長** 一日中家にいるのに何で充実しないんだと。

○**ティー・キャンヘーン委員** いえいえ。例えば24時間中12時間を振り分けると

○**吉野英岐部会長** 余暇だとして。

○**ティー・キャンヘーン委員** となると、

○**吉野英岐部会長** 長過ぎてしまって、今度は。

○**ティー・キャンヘーン委員** それは多分答えにくいのではないかな、充実しているかという、何しているんだろうねという感じになりませんかね。

○**吉野英岐部会長** 和川委員。

○**和川央委員** ここは、暇ですかと聞いているわけではなくて、充実していますかと聞いているので、要因とすれば時間と質の2つが入ってくるのだらうなというのがあります。

そういった意味で、時間は測れるけれども、では今まで集会に1週間毎日行っていたのが行けなくなった、余暇時間はあるけれども。その場合は多分実感は上がらずに、下がる、

特にコロナの関係なんかで、高齢者は今まで行っていた博物館に行けなくなったとか、与太話ができなくなったという可能性はあるのかなと感じています。

○吉野英岐部会長 どうぞ。

○ティー・キャンヘーン委員 私もコロナかなと思ったのですが、実はコロナ前のほうが下がっていて、結局だからコロナじゃないよなど内心想っていて、何だろうなど。

○吉野英岐部会長 コミュニティーに詳しい若菜先生に聞いてみましょう、何で「余暇の充実」というのは実感が上がらないのでしょうか。

○若菜千穂副部会長 「余暇の充実」ですよ、年配の。

○吉野英岐部会長 うん。時間がありそうな人でも時間の充実感が出てこない。

○若菜千穂副部会長 私もコロナかなとは思いますが。

○吉野英岐部会長 コロナの前からあまり高くないですよ、だけれども。

○ティー・キャンヘーン委員 今資料5-2のイメージで見ている、これがなかなか

○吉野英岐部会長 平成28年も結構低いのですよ、実は。今より低いぐらいです。平成28年はコロナがなかったはずだから。

○ティー・キャンヘーン委員 いや、それは置いておいて。

○吉野英岐部会長 70歳以上は平成28年は高くて、50歳から59歳が低いとか、それは何となく時間がないのだろうなという気がしますけれども。

○山田佳奈委員 年齢層からすると総体的には高めなのですよ。

○吉野英岐部会長 高い年齢が。

○山田佳奈委員 年齢層が

○吉野英岐部会長 年齢が上がると充実感がちょっと増えるのですよね。

○山田佳奈委員 20代か70代か。

○吉野英岐部会長 20代は充実しているんですね。

○山田佳奈委員 20代が3点台

○吉野英岐部会長 どうぞ。

○山田佳奈委員 実はこの余暇のところが一番解釈が難しいところかなと思っていたところがありまして。というのは、余暇という言葉自体が、私の記憶では社会史的にはどうか、勤労時間が定められるようになってから生まれた言葉というふうに何かで読んだ気がするのですけれども。ですので、どう解釈するか実は一番難しいのではないかなと思っている単語でした。

5-2の資料はありがたい資料で、年代別で見ますと総体的には70歳以上の方は比較的数字は高い。そのトレンドは多分あまり変わらない、総体的にはですね。だとは思うのですけれども、かといって、先ほど皆さんおっしゃったように少なくとも平成31年はかなり高く出ているので、何でこれ高いのかなと。ちょっとよく分からないのですが、全体が高いのです。そこからまた下がってくるといったところで、私も皆さんおっしゃるようにコロナかなというのはあるのですが、と同時にやはり家事ですとか日頃の生活にかかる時間と分けにくいというのはあるかなとは思っていますので、それがどう余暇と余暇でないところと区別されるかというのはちょっと難しいなと。

その意味では、先ほど和川委員さんもおっしゃった、場合によっては行動の時間のところとのクロスで見るという方法もあるかなとは思いました。つまり、もしすごく細かくやろうと思えばですけれども、もしかかなり厳密に見ていこうとすれば70歳以上の方の行動時間というのがどういうふうに変化したかというのを見させていただくというのはあるのかもしれません、どこまでやるか次第です。

○吉野英岐部会長 ありがとうございます。

竹村先生、「余暇の充実」は何か御意見ありますか、下がっているとか、低いとか。どうぞ。

○竹村祥子委員 「余暇の充実」のところの自由な時間の確保とか、スポーツができるかとか、参考のために話が進んでいるのですけれども、全体が1,000を超えているとはいえ、クロス表の一つずつのセルの中的人数がうんと減っていくこと自体の影響は出ないのかを確認したいと思いました。このところについては統計上のセルの中が例えば1桁になってしまって、統計上の解釈として無理やり読んではいけないということはないのかちょっとそれだけ気にしていました。

以上です。

○吉野英岐部会長 空気感がありますね。

ティー先生が見ているのは5-2を見ていると思うのですけれども、5-2だと各カテゴリー別に出ていて、まあまあ数字あるように見えるのです、どれも。

どうぞ、ティー先生

○ティー・キャンヘーン委員 何ていうのですか、年代もそうですけれども、実際は60歳の無職の方が職業ある人よりも余暇の感じ方がいいということもあって、確かに下がってはきているけれども、流れもいい方だなという、そういう評価しては駄目なのですから、何でしょうね。

○吉野英岐部会長 子どもの数もあまり関係ないんだよね、子どもが多いと時間がなくて

○ティー・キャンヘーン委員 夫婦2人の方がすごくよくてというような感じです。

○吉野英岐部会長 子どもが多くてもそんなに減らないですよ、ちょっと減るけれども。基準年なんかほとんど変わらないですね。子どもがいない人の方が感じないというんだからね、子どもの遊び相手になっていないのかな。

○ティー・キャンヘーン委員 若菜委員も山田委員も言ったとおり、これ解釈しづらいというか、解釈できないんじゃないかな、何だろう、要因分析

○吉野英岐部会長 難しいと。

○ティー・キャンヘーン委員 難しい。

○吉野英岐部会長 では、次にいきましょう。

○ティー・キャンヘーン委員 すみませんね。

○吉野英岐部会長 いや、難しい問題から入ってしまったので、すみません。なかなか余暇の概念というものの捉え方とか、山田先生からあるようにどういうふうには見ているか、丸がつく数字が違うかもしれないし、持ち時間だけでも見られないですし、アクティブなのか、ノンアクティブで見ている方がいいのかとか、いろいろ見方が多くてこれ宿題にして、もう少し後で考えます。

次は、「地域社会とのつながり」の方が比較的イメージが湧きやすいのと、「地域社会とのつながり」は基準年に比べても落ちてはいますし、基準年は高いのです、前の3年で見ると、資料5-2なんかで分野別実感の「地域社会とのつながり」を見ると基準年が高いのは確かにそうなのだなと。なのだけれども、ほぼ全落ち状態です。どこをどう切っても年代や職業や居住年数、地域で切っても「地域社会とのつながり」を感じる実感度は下がっていると言わざるを得ないですね。だから、大きくあちこちに影響を与えているし、例えば特に沿岸とかにも影響が当たっているのではないかなと、落ちがちょっと大きいかなというふうにも見えるのですけれども、これはコロナの影響として考えていいかなとも思うのですけれども、谷藤委員いかがでしょうか。コロナだけでは分からないけれども、どうでしょう。

○谷藤邦基委員 コロナの影響は間違いなくあるのでしょうか。ただ、コロナだけかどうかというところになってくるのかなと思うのですけれども、身近なことで言うと私の町内会でもコロナの関係で班長会議を毎月やっていたのをやらなくなったようなのです。全然やっていないわけではないけれども、間隔を延ばしたりしています。地域の行事も今のところコロナを理由に、本当にコロナが理由かはともかくとして、コロナを理由にやっていないという状況あるので、だからコロナの影響というのは推測するのは無理はないですよ。あとはというか、皆さんどう思うかは別にして、取りあえず私の頭の中ではほかの要因はないのかなと。

もう一つ心配するのは、フォアキャスト的な話になりますけれども、コロナが収まったら元に戻るのだろうかという心配、不可逆的な変化になりかねないですよ、これを見ていて。コロナにかかわる考え方としては2つあって、コロナだからしょうがないねと、一つは言えるのだけれども、収まったときに、バネが元に戻るように戻るかといったら多分戻らないのではないかと心配。政策的にはむしろそっちの心配をしなければいけないだろうと思うのです。

あと先ほど来沿岸の話が出ていますけれども、沿岸は災害公営住宅等で従来型コミュニティがなくなってきているところへの対策、ただこれは復興の方で問題意識として持っていますので、そこはお任せでいいのかなと、私はそっちに関わっているから、お任せと言ったのはまずいのかもしれないけれども。

○吉野英岐部会長 そこら辺は考えてもらえば。

○谷藤邦基委員 そちら少なくとも問題意識としては持っていますので、何かのアクションはあるかなと思っています。

○吉野英岐部会長 部長。

○小野政策企画部長 今谷藤委員おっしゃったのは非常に重要で、そもそも変動要因がコロナが要因なのか、コロナ以前のものなのか、同じ下がり続けていてもその要因が違っているかもしれないし、動きが変わっているかもしれない。さらに、コロナが要因だったとある程度分かったとして、それがコロナがある程度収まっても戻るか戻らないのかというところが非常に重要だと思います。

福島県の方で、実はコロナを経て総合計画をつくったのです。その中で、とても参考になるのですけれども、やはり戻るものも戻らないもの、より強めていかなければいけないものと政策を大きく分けていて、例えばつながりとかになるとある程度コロナが収まってもその距離感というのはとらざるを得ないだろうと。とすればどういった手を打たなければいけないのかというような観点から総合計画をつくって、ここは政策一個一個を見ていかなければいけないのですけれども、例えば従来であればイベントを開催して、多くの人を集めてという指標ができていたわけですが、この指標が多分成り立たなくなってくる可能性ありますよね、リモートでどうするとか、あるいは集まらなくてもいいように

どういふふうなつながりを強める策を打っていくのか、全くその手法が変わってくるといったところもありますので、すみません、感想で恐縮なのですが、ここはこれから政策をつくる上でも非常に重要な要素かなというふうに考えております。

○吉野英岐部会長 ありがとうございます。時間があと数分なので、若菜さん、さっきこの件で少しお話あったので、何か感じるころがあれば、若菜委員の意見を聞いて今日は終わりにします。お願いします。

○若菜千穂副部会長 今谷藤さんおっしゃったように、コロナ以外の要因もというところで、確かななと思って、資料6-2の記入欄を見たのですが、やっぱりそもそも人間関係が煩わしいという人で、ちょっとこれ調査もあれなのですが、地域社会といったときにどうしても自治会とか町内会という地縁の方のコミュニティを連想しがちですが、私たちの活動も地縁は煩わしい、若い人は特に。

では、別に地縁のつながりではなくて志縁、志の方の志縁はサークル活動とかいろんな形で社会とのつながりはあり得るので、そっちももっと充実させていこうという、多分そういう流れになるのですが、そういう意味で地域社会といったときに、どうしても地縁的な社会のほうに寄っているバイアスがかかってしまっているのだなと。そうすると今後はずっと低下傾向に、コロナが収まってもですね、今後はずっと下がっていくと。

でも、「地域社会とのつながり」というのは自治会とか町内会だけではないよねというところの動きと、それをこのアンケートにどう絡めさせていくかというところは今後すごく難しいのだろうと、先ほどのお話を聞いて思いました。

だから、コロナの影響もあって下がって、でも構造的に今後も下がっていくと。でも、ほかのつながりあるよねというところの評価と、それをどう捉えるかというところは注意しなければいけないなとは思いました。

○吉野英岐部会長 ありがとうございます。いろいろまだ考えなければいけない点があるのですが、一旦今日お時間の関係から「地域社会とのつながり」の途中まで聞いたということにして、次回は「地域社会のつながり」の後半部分、御意見いただいていない方からいただくのと、その後低下している分野ですね、「地域の安全」、「仕事のやりがい」、「必要な収入や所得」について少し見て、あとは上昇している分野というのもあるのですが、これは深刻度といえば低下しているよりはいいので、少し短めに分析をして、次回一通り各分野の解釈について先生方の御意見をまとめていきたいと思っております。

ちょっと中途半端なところで申し訳ありませんけれども、一旦事務局の方にお返ししたいと思っております。

○高橋政策企画課評価課長 長時間にわたりまして御議論いただきましてありがとうございました。

(5) その他

○高橋政策企画課評価課長 続いての議論につきましては、来週またお願いしたいと思っ

ております。次回の部会につきましては、5月26日の9時半を予定しております。さらに、次回の部会につきましても本日と同じ内容になりますので、非公開での開催とさせていただきたいと考えてございます。

3 閉 会

○高橋政策企画課評価課長 それでは、以上をもちまして本日の部会を終了したいと思います。本日はありがとうございました。